

# ネペンテスの挿し木に適した用土の検討

上野明楽

ネペンテスの挿し木をする際に、どの用土を用いるのが初期生育に好ましいかを調べるために、手に入りやすい用土3種類と、水苔をマルチングしたもの2種類の計5種類を用意して比較した。

## 用土の種類と pH

令和5年8月にネペンテス ラミスピナ×レイnardティアナ (*Nepenthes ramispina* × *N. reinwardtiana*) の挿し木をする際に、①赤玉土単体、②鹿沼土単体、③水苔単体、④赤玉土+水苔マルチング、⑤鹿沼土+水苔マルチングの5種類を用意した。水苔をマルチングした理由は、用土の乾燥防止と、酸性～弱酸性の用土を好むネペンテス属の pH を酸性に傾けることが目的である。挿し木に使用した茎は新芽が動き出すまでのおよそ1か月間水揚げを行い、ミスト室に置いて約20℃から35℃の温度で管理した。なお、この間発根は確認できなかったが、芽の動きを確認した後に、2.5号ポットに各用土に一本ずつ各1ポット挿し木を行い、全鉢同時に灌水を行った。灌水の際に使用している井戸水は pH7.0 である。

なお、挿し木をしてすぐの状態(9月)とその4か月後の状態(12月)の用土の pH は表1の通りである。

表1 各土壌の pH

用土	①	②	③	④	⑤
9月	6.5	6.5	6.5	6.0	6.0
12月	7.0	7.0	6.5	7.0	7.0

9月の状態での①～③の pH はそれぞれ同じ値の6.5となっており、④、⑤に関しては pH6.0 とやや酸性に傾いていた。12月の①～③の鉢の pH は、③が pH6.5 で、それ以外は同じ pH7.0 の値になり、定植後すぐに測定した値と差があまりなかったが、④、⑤に関しては pH の差が1と大きくなり、9月の段階では水苔を使用することで、土壌を少し酸性に傾かせることができた。なお、③以外は4か月の間で pH が上昇した。今回用

いた用土は弱酸性の状態に対し、③は同じ値だったことから、水苔は鹿沼土、赤玉土に比べ pH が安定している資材だと思われる。

## 結果

表2 地上部と地下部の比較

用土	①	②	③	④	⑤
地上部の生育状況	枯死	良好	やや不良	やや不良	やや不良
発根伸長	発根なし	極めて良好	不良	やや不良	良好

8月から新芽が動くまでのおよそ1か月間は水に挿し、新芽が動き始めた挿し木後は過度の乾燥に注意し、鉢の表面が半分ほど乾いた状態で灌水を行い、12月までの4か月間管理した。その後、根鉢を崩し、水洗いをして発根状況を確認した(表2)。地上部の生育は、①、②以外は大きな差がなかった。

②～⑤は発根および根の伸長があった。最も良好だったのは②(写真1)で、最も不良だったのは③(写真2)であった。根の伸長の盛んだった②は地上部の成長が最も盛んであった。④と⑤に関しては、②と③の中間的な状態を呈し、両者では⑤のほうが良好な結果を示した。(写真3、4)

一方で、赤玉土単体に挿した株①は枯死し(写真5)、赤玉土+水苔マルチングをした株④は根の発根が確認できたことから、用意した株の状態が悪かったため、枯死した可能性がある。

## 所感

今回の比較には、用意した挿し木の本数が少なかったこともあり、詳しく考察するためには不十分であったが、同じ鹿沼土でも水苔をマルチングしたもの、しないもので根の伸長に大きく差が出たのが興味深い。水苔の保水力の高さを実感した。pH で初期の根の発根、伸長および地上部の生育に差が出ると予想していたが、保水力や通気性の方がより強く生育に影響していると思われた。最も根の伸長が悪かった③では、地下部に常時水分を保持することで、根の伸長が促されなかったことがわかる。

なお、なぜ赤玉土単体での挿し木が枯死し、水苔をマルチングした赤玉土が生存したのかについてはさらに比較試験を進めていくことで明らかにしたい。



写真 1 鹿沼土小粒単体の結果



写真 4 鹿沼土小粒 + 水苔マルチングの結果

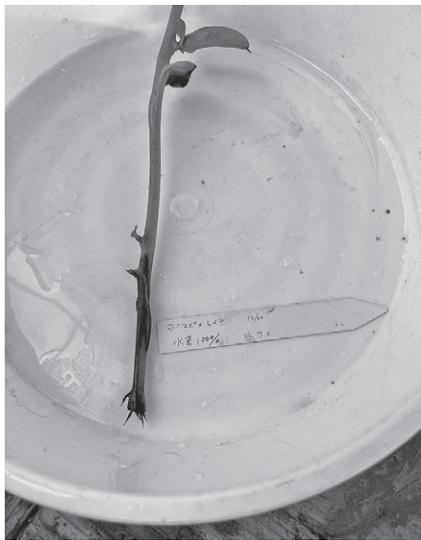


写真 2 水苔単体の結果



写真 5 赤玉土小粒単体の結果



写真 3 赤玉土小粒 + 水苔マルチングの結果